

『今日の人びと』 (1878-1899)

—— ヴェルレーヌによる評伝とマラルメ像を中心に ——

倉方 健作

はじめに

小冊子『今日の人びと¹⁾』 *Les Hommes d'aujourd'hui* は、19世紀後半のフランスを彩った人物を知る手がかりとして、とりわけ表紙を飾ったカリカチュアが参照される機会の多い資料である²⁾。同時代を対象とする研究者にとっては、半獣神に擬せられたマラルメ、母音の形をした積木を彩色する幼児ランボーの姿は図像集等で既に馴染みのものだが、その反面、発表媒体である『今日の人びと』の実態は必ずしも正確に把握されていない。一例として、ジャン=リュック・ステンメッツがマラルメの評伝において『今日の人びと』と出版者レオン・ヴァニエに触れている一節を確認してみたい。

このヴァニエは、やがて、良きにつけ悪しきにつけ、未来の象徴派に惹かれることになる出版者である。この時は、「現代人物叢書」という4頁の小冊子の叢書を刊行していた。風刺画家リュックの手による古今の人物戯画が色刷りの表紙を飾り、それに続いて、取り上げる著者に関する論考1篇と、文章や詩の抜粋が載るといった形式をとっていた。ちょうどヴェルレーヌは、『呪われた詩人たち』の後、マラルメを取り上げるものを何か編集したいと思っていた。この〈半獣神〉は、叢書の幕開けとなるどころか、—— 後世では名前さえ忘れられてしまう端役の人々よりずっと後の —— 296号であった³⁾。

¹⁾ 後述する冊子の傾向と発行形態を考慮し、本稿では『今日の人びと』の訳題を選択した。邦訳『マラルメ全集』は「現代人物叢書」の訳で統一しているが、編者の一人は冊子の体裁から「むしろシリーズ小冊子「今日の人物」とした方が実情に即しているかもしれない」との留保も示している(『マラルメ全集 第3巻 別冊解題・注解』、筑摩書房、1998年、206ページ)。

²⁾ 『今日の人びと』を紹介した日本語の書籍には鹿島茂『60 戯画』(中公文庫、2005年)がある。カラーで採録された19世紀のカリカチュア60点のうち32点が『今日の人びと』から採られている。

³⁾ Jean-Luc Steinmetz, *Stéphane Mallarmé*, Fayard, 1998, p. 244. 訳語の一例を確認する意図から、邦訳書の訳文を借用した(ジャン=リュック・ステンメッツ『マラルメ伝 絶対と日々』、柏倉康夫・永倉千夏子・宮寄克裕訳、筑摩書房、2004年、295ページ)。

詳細は徐々に確認していくことになるが、完全な誤謬とは言えないまでも、この短い記述にはいくつかの事実誤認と先入見に由来する誤解が含まれている。とはいえこれはステンメッツひとりを槍玉に挙げるべき事柄ではないだろう。同様の誤りは多くの評伝・研究書にも認められるものであり、その大部分は先行調査の不足に起因している⁴。本稿は、このような現状に置かれている『今日の人びと』の調査を通して、同時代の出版状況と文壇情勢との関わりの一側面を明らかにするとともに、ヴェルレーヌとマラルメという世紀末詩壇の巨頭が示した同冊子への姿勢を示すことを目的とする。まず『今日の人びと』の創刊から終刊に至る経緯を概観したのち、ヴェルレーヌの冊子への関与を整理し、最後にマラルメを扱った 296 号をめぐる状況の確認を試みたい⁵。

『今日の人びと』（1878-1899）

刊行期間と冊子の形態

『今日の人びと』は 1878 年秋に創刊され、1899 年初頭の 469 号をもって長期に及んだ刊行期間を終える。全 469 号という数字はこの種の刊行物にしてみれば膨大なものだが、週刊のペースを保っていれば 9 年間で達成されるはずである⁶。それにも関わらず『今日の人びと』の刊行が 20 年以上の長さ

⁴ これまでで最も詳細な調査は、書店主ジャン＝ミシェル・プラスが文芸雑誌の収集家アンドレ・ヴァスールと連名で刊行した『文芸雑誌・新聞書誌』に収められている。同書の第 2 巻に全号のリストをはじめとする『今日の人びと』の詳細な記述がある（Jean-Michel Place et André Vasseur, *Bibliographie des revues et journaux littéraires des XIX^e et XX^e siècles*, 3 vol., Éditions Jean-Michel Place, 1973-1977, t. 2, pp. 89-135）。

⁵ 本稿執筆にあたって、東京大学所蔵の『今日の人びと』を参照した。全 469 号のうち 455 号のみを欠くが、ほぼ完全なコレクションが良好な状態で保存されている。山田珠樹旧蔵を示すエンボスが押されており、9 冊に製本されて現在文学部 2 号館図書室に配架されている。また早稲田大学はフランス国立図書館が所蔵する同誌を原本とした全号のマイクロフィルムを所蔵している。複写の過程のミスからかページの脱落も散見され、また肝心のカリカチュアがモノクロという難点はあるが、全て初版に依拠しているため、再版も混じる東京大学のコレクションと併せた比較対照が可能となった。

⁶ 『今日の人びと』の大部分には発行年月日の表記がないが、例外的に 6 号から 24 号、および 447 号から 452 号の表紙には日付が印刷されている。6 号の日付は 1878 年 10 月 18 日であり、以降 12 月 27 日の 16 号まで同年内は毎週金曜日が発行日となっていたことがわかる。翌 1879 年に入ると、1 月 4 日付の 17 号から 2 月 22 日付の 24 号まで、発行日は土曜日に変更されている。また刊行末期にあたる 1897 年 2 月 27 日付の 447 号から同年 4 月 3 日付の 452 号までは発行日は土曜日であり、おそらく基本的な方針としては毎週末発行の週刊誌という位置づけであったものと思われる。

にわたった最大の理由は、ときに年間の発行が 10 号にも満たない刊行ペースの著しい不規則さに求められる⁷。また発行元の変更に伴う長期の休刊もその一因となった。サンカルブル書店 Cinqualbre によって創刊された『今日の人びと』は、1883 年末発行と推定される 229 号をもってしばし休刊状態に入り、1885 年中頃になってこれをヴァニエ書店が引き継いでいる。

冊子の形態は、1 枚の横長の紙を半分に折ったもので、大きさはほぼ A4 版に相当する。したがって全体は 4 ページとなり⁸、取り上げる人物のカリカチュアが表紙を飾り、残りのページには人物評が続く。この文章は、1 ページに小さい活字で 80 行も詰まっていることもあれば、余白を大きくとった 30 行前後のレイアウトというケースも見られる。さらに最終ページが既刊号のリストや広告に用いられることもあったため、長い紹介文と短いものとは分量にしてゆうに倍以上の開きがある。取り上げられる人物はタイトルが示すとおり「今日の」人物であり、直近の物故者が扱われた少数の例外を除けば、基本的には存命の国内の人物が対象となっている。『今日の人びと』というタイトルには、大衆のアクチュアルな興味に応えるという商業的な役割と、十分には知られていない人物を紹介しようという啓蒙的な使命とが同時に反映されていると言えるだろう。

創刊の経緯と「ピエールとポール」の誕生

『今日の人びと』の創刊は 1878 年 9 月と推定されるが、その経緯には当時の青年文学者フェリシアン・シャンソールが大きく関与している。後年彼を取り上げた 327 号には以下のような記述が見られる。

フェリシアン・シャンソール、文学者、1858 年ディーニュに生まれる。 […] フェリシアン・シャンソールがアンドレ・ジルと版元のサンカルブルとともに、1878 年に『今日の人びと』を創刊したことに触れておこう。この定期刊行物を

⁷ 前述の通り多くの場合発行日は記載されていないが、プラスとヴァスールは人物評の内容からおおよそその発行時期を推定している (Place et Vasseur, *op. cit.*, pp. 124-134)。しかしこの作業は、記事の執筆から印刷・発行に至るまでの工程がごく短期間で行われたという前提の上に成り立っている。また場合によっては必ずしも号数の順に刊行されたとは考えにくい点もあり、各号の発行時期の確定は非常に困難である (プラスとヴァスールの 227 号への注記参照。 *Ibid.*, p. 125)。本稿で主に扱うヴェルレーヌが関わった号に関しては、ヴァニエとの書簡からある程度の推測が可能であり、プレイヤード版散文全集の編者ジャック・ボレルも大半の号について推定の発行年を提示している (Paul Verlaine, *Œuvres en prose complètes*, éd. Jacques Borel, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1972, p. 1345)。ただし同書はプラスとヴァスールによる書誌の前年に刊行されているため、その調査結果は反映されていない。

⁸ プーランジェ將軍を扱った 229 号のみ、紙葉 1 枚を挟み全 6 ページとなっている。

最初に思いついた彼は、創刊から30号までの人物小伝を書いた。程なく彼は敵方に寝返り、様式と形態を同じくする対抗誌『レ・コンタンボラン』をイラストレーターのル・プティとともに創刊したが、これは43号しか続かず、今日では全号揃いのコレクションは珍本、稀観書の類である⁹。

地方からパリに出てきたばかりの20歳の青年が『今日の人びと』の刊行にこぎつけた経緯の詳細は明らかではない。シャンソールは1882年発表の自伝的小説『ディナ・サミュエル』において、主人公の青年がジルに擬せられる人物の知遇を得て文壇に登場する経緯を描いているが、そこには『今日の人びと』に類する冊子の創刊に関連する叙述は見られない¹⁰。この沈黙は、引用記事にあるように、のちに「敵方に寝返り」、同種の企てに失敗したシャンソール本人にとって『今日の人びと』の記憶があまり快くないものであったためとも考えられる。

冊子の成功がカリカチュアの大家アンドレ・ジルの筆に多くを負っていたことにどうやら疑いはない。そうした現実から目を背けたシャンソールが、ジルの力が無くとも成功できるのではないかという夢想到に駆り立てられ、30号をもって『今日の人びと』を離れたことも想像に難くない¹¹。しかし新たに創刊された『レ・コンタンボラン』が短命に終わった事実は、やはりカリカチュアの名人芸こそが冊子の主役であり、人物紹介はそれに従属するものでしかないという性質を明らかにしている。またシャンソールの文章それ自体に魅力や新鮮味が欠けていたことも否めない。先述のとおりシャンソールはジル以外には文壇に知己をほとんど持たないため、文章の内容もゴシップの聞き書きや遠目からの印象に留まっている。そもそも当初の『今日の人びと』は、創刊号のユゴーから30号のクレマンソーまで、もはや紹介を必要としないほどの著名人が居並んでおり、ことさらに彼らを取り上げる時事性も感じられない。おそらく冊子の価値のほとんどは表紙のカリカチュアに求められ、ある種のプロマイドに近い受け取られ方をしていたのではないかと想像される¹²。

⁹ *Les Hommes d'aujourd'hui*, n° 327.

¹⁰ Félicien Champsaur, *Dinah Samuel*, Séguier, « Bibliothèque décadente », 1999.

¹¹ なお、対抗誌『レ・コンタンボラン』で取り上げられた43人の大半は既に『今日の人びと』に登場した人物であり、その紹介文の内容も酷似している (cf. Place et Vasseur, *op. cit.*, pp. 136-146)。

¹² ゾラ、ガンベッタ、サラ・ベルナルルらに続き、10号はジル自身を取り上げており、『今日の人びと』の成功が画家の高い知名度を背景としていたことが窺われる。なお、この号の表紙のみ例外的にアルフレッド・グレイヴンが担当している。

シャンソールが 30 号を最後に『今日の人びと』を離れたあとは、人物紹介は「ピエールとポール」——あるいは「ペテロとパウロ」か——という署名で書かれるようになる。その後 20 年にわたって用いられるこの筆名に関して、シャンソールが去った直後の 31 号に以下のような付記が掲載されている。

われらが刊行物の成功、すなわち高名な風刺画家ジルの見事な肖像画に負う成功は、読者諸兄の好意に応える絶えざる努力をわれわれに課すものである。この目的のために、われわれは真摯な文学者たちの協力を取り付けており、彼らは真実で興味をそそる逸話に溢れた筆致で、心地よい文章を各人の伝記に提供し、賛辞と非難とをバランス良く配分する術も心得ている。われらの共同執筆者たちは、全員で共有するペンネームの影に慎み深く身を隠す才能を有しているが、やがて読者諸兄はその仮面を完全に剥ぐことができるものとわれわれは確信している¹³。

ここでは冊子の成功が全てジルの手柄とされており、人物紹介の書き手の個性はもはや問題とされていない。同冊子が以降も「ピエールとポール」による人物紹介とともに成功を続けたという事実は、裏返せば 30 号までのシャンソールの署名が無意味であったことを証明している。

ヴァニエ書店への移行後の傾向の変化

ブーランジェ將軍を扱った 229 号を最後にサンカルブル書店の『今日の人びと』は休眠状態に入り、約 2 年の空白期間の後、レオン・ヴァニエが刊行を引き継いだ。ヴァニエ書店への移行が冊子にもたらした変化の一つは、まず表紙と人物紹介の担当者の多様化であった。カリカチュアは創刊から 142 号までをアンドレ・ジルが、彼の死後はアンリ・ドゥマールが主に担当していたが、ヴァニエのもとでは数多くのイラストレーター、画家に機会が与えられるようになる。その大部分は数回、もしくは一度きりの担当であったが、総勢は 70 名近くにのぼり、著名な画家としては、ピサロ、シニャック、スーラ、ロートレックなどが挙げられる。また人物紹介も、引き続き使用された「ピエールとポール」の他に、個人名による署名記事が見られるようになる。計 26 号を担当したヴェルレーヌを筆頭に、ユイスマンス、フェリクス・フェネオン、ギュスターヴ・カーン、ジャン・モレアスらが複数の号に人物紹介を執筆しており、そのほかにもラフォルグやレニエ、アナトール・フランスといった一度きりの執筆者も含めれば、70 人を越える多様な書き手の名前が

¹³ *Les Hommes d'aujourd'hui*, n° 31.

誌面に登場している。

冊子が扱う人物の選択にも大きな変化が見られる。サンカルブル時代に多く見られた左派・反教権主義の議員や活動家の姿は影をひそめ¹⁴、新進の文学者と画家が頻繁に登場するようになる。こうした傾向の変化は、『今日の人びと』がヴァニエ書店の宣伝誌の色合いを強めたこととも関わっている。取り上げる人物が書店の近刊書に関連することが多くなったばかりではなく、第4面はしばしばヴァニエ書店の広告が占め、ときには書籍の割引セール情報が掲載されることさえあった。このような冊子の性格の変化が、人物紹介を結果的にいわゆる「提灯記事」に近づけたことも否めない。

実名の文学者とともに「ピエールとポール」は多くの人物紹介を担当し続けたが、その署名の影に隠れた実際の書き手に関する詳細は不明である¹⁵。しかし「ピエールとポール」の仮面の下には、たびたび書店主のレオン・ヴァニエ自身の姿があったらしいことは、彼を扱った『今日の人びと』320号で紹介文を担当したヴェルレーヌがほのめかしている。

そして『今日の人びと』だが、これは彼が数年来指揮をとっており、「ピエールとポール」という名前のもとで、たびたび、大部分を彼の才気と学識に負っている伝記が掲載されている¹⁶。

書店主の意向が冊子に直接関与していたことを明らかにする文章であり、こうした性質からヴァニエ時代の『今日の人びと』は、1880年代から90年代にかけて文壇の新たな潮流を生みだした書店の隆盛と表裏一体となった冊子として捉えられる¹⁷。

¹⁴ こうした人物の選択にはサンカルブル書店の政治的傾向が顕著に反映されている。『今日の人びと』第66号には同書店の新雑誌『反教権週間』*La Semaine anti-cléricale* 創刊の告知が掲載され、その後も反教権的傾向を持つ人物を扱った号はしばしば同誌の広告を伴った。

¹⁵ 唯一の例外として、ヴェルレーヌを扱った244号の「ピエールとポール」が、実際にはヴェルレーヌ本人であったことが判明している。同号の初版では「ピエールとポール」と署名されていたが、第2版には「ポール・ヴェルレーヌ」と本名が記されている (cf. *Ceuvres en prose complètes*, p. 1382)。本文にも多少の異同が見られる。

¹⁶ *Les Hommes d'aujourd'hui*, n° 320 ; repris dans *Ceuvres en prose complètes*, p. 808.

¹⁷ 『今日の人びと』で既刊号のリストがたびたび掲載されたことは述べたが、サンカルブル時代に発行された号も、発行所の表記を変更した上で再版しヴァニエが販売していたことが東京大学所蔵のコレクションから確認できる。再版時におけるカリカチュアの扱いに関しては、本稿の脚注59を併せて参照されたい。

『今日の人びと』とヴェルレーヌ

「ビブリオポール・ヴァニエ」の勃興

『今日の人びと』に書店主の意向が関与していることは確認したとおりだが、その一方でレオン・ヴァニエがどのように当時の状況を把握していたのかという問題に関しては、掘るべき資料の数が限られている。書店主自身を対象とした調査・研究がそもそも非常に少なく、現時点で最も詳細にヴァニエを論じた研究書『ラフォルグとその時代』の著者、ジャン＝ルイ・ドゥボーヴによれば、ヴァニエの活動期は出版活動が比較的自由に行われていた時期にあたり、国立中央文書館にもセヌヌ県にも関係書類が存在していないことがその一因となっている¹⁸。ここでは主としてドゥボーヴが用いた資料に依拠しながら、まずはレオン・ヴァニエとその書店の活動を概観してみたい。

1847年12月27日にパリに生まれたレオン・ヴァニエは、生年で言えばヴェルレーヌより3歳、マラルメより5歳下である。14、5歳の頃から書店で働きはじめ、その傍らソルボンヌの夜間講義に通うような旺盛な知識欲を持っていたという。その後1870年頃に独立、サン＝ミシェル大通りに並行したオトフィユ街6番地に店を開く。書籍の販売に加えて1876年からは出版にも参入したが、1880年代半ばまではその活動はごく限られたものであった。ヴァニエ書店の大きな転機は、1881年に文芸誌『パリ・モデルヌ』の発行を引き受けたことである。

この真面目な雑誌は、当時いわば最後の戦闘的な『現代高踏派詩集』のようなものだった。ルコント・ド・リール、バンヴィル、コペ、マンデス、エレディア、メラ、ヴァラードといった名前が煌いていた。堂々とした詩句の傍らでは、活気に溢れた記事が、人々が過度に強調するとおり、見事な戦いを繰り広げていた——これこそが現在の非常に文学的なヴァニエ書店の原点であった¹⁹。

ヴェルレーヌがここで回想するとおり、『パリ・モデルヌ』誌によってヴァニエは初めて詩壇に深く関わり、その潮流を意識するようになったものと思われる。この間1878年に書店は住所を移したが、新たな所在地である「サン＝ミシェル河岸19番地」は、ヴァニエ書店の代名詞として世紀末の詩壇に大いに幅を利かせることになる²⁰。

¹⁸ Jean-Louis Debauve, *Laforgue en son temps*, Neuchâtel, La Baconnière, 1972, p. 23.

¹⁹ *Les Hommes d'aujourd'hui*, n° 320 ; repris dans *Œuvres en prose complètes*, p. 805.

²⁰ 一方で、ヴァニエが当初から書店を経営していたわけではなく、「もともと彼は河岸で釣具を販売していたが、ある日、デカダン詩人たちの響きの良い言葉に驚嘆して、

同様に書店にまつわる語としては、ヴァニエが自ら名乗った「ビブリオポール」bibliopoleの呼称が知られる。この語の含意を推し量るには、ヴェルレーヌがヴァニエに宛てた書簡が助けとなるだろう。ヴェルレーヌは1886年に「この堂々たる巨大なビブリオポール (Cette bibliopole auguste et colossale)」というユゴーの詩句を発見したことをヴァニエに書き送り、以下のように忠告している。

ここでのビブリオポールは、「書物の都」(Ville de livres)の意味で解釈されません。ですから、われわれがばかにされる事態を避けるためにも、本の末尾から「ビブリオポール・ヴァニエ」を削って用心したほうがいいでしょう²¹。

ヴェルレーヌの指摘は、逆に言えばこの語が大仰な「書物の都」の意では用いられていないことを示唆している。おそらくヴァニエは、現代でも英語に見られる「書籍商、古書商人」の意味で「ビブリオポール」と名乗っていたものと思われる。語の持つ目新しさに加えて、ヴァニエ書店が出版業のみに限らず、サン＝ミシェル河岸の店頭で他社の刊行物を含む書籍の販売を続けていたためだろう。

書店の躍進から終焉まで

『パリ・モデルヌ』が1883年に終刊を迎えた翌年、1884年のヴェルレーヌの詩集『往時と近年²²』と、やがて時代の寵児となるジャン・モレアスの詩集『シルト』の刊行を契機として、ヴァニエは詩壇の新たな潮流を掴むことに方針を定める。この野心的な挑戦には、「デカダン」の若手詩人たちと自らを重ね、高踏派の牙城として権勢を誇るルメール書店を射程に入れた新興書店ヴァニエの姿がはっきりと現れる。ヴァニエの躍進はただちに文壇の認めるところとなり、あるときは「新たな詩流のルメールとなる野心に燃える

彼等の出版者となった」とする説が存在する (Frédéric-Auguste Cazals et Gustave Le Rouge, *Les Derniers Jours de Paul Verlaine*, Mercure de France, 1911 ; Slatkine Reprints, 1983, p. 202)。ピエール・ブチフィスはヴェルレーヌの伝記でこの説に触れ、さらに「奴の商売は結局 vers [詩句 / (生き餌の) 虫] を売ることに変わりはない、と口の悪い人々は言った」との逸話を添えている (Pierre Petitfils, *Paul Verlaine*, Julliard, 1994, p. 277)。しかし、ドゥボロヴの綿密な調査が示したヴァニエの経歴と重ねれば、「釣具屋ヴァニエ」はおそらく伝説に過ぎないものと推測される。

²¹ 1886年8月10日付レオン・ヴァニエ宛書簡 (Paul Verlaine, *Œuvres complètes*, Club du Meilleur Livre, 2 vol., 1959 et 1960, t. 1, pp. 1201-1202)。このユゴーの詩篇は1880年に発表された長篇連作詩「驢馬」L'Âneを指す。

²² Paul Verlaine, *Jadis et Naguère*, Léon Vanier, 1884。

かのようなレオン・ヴァニエ書店²³」と評され、またより単純に「デカディスムのルメール²⁴」と見なされるようになる。

この時期の書店の目覚しい展開は、出版物を彩る文言の変遷にも見て取れる。新生ヴァニエの出発点となる『往時と近年』の裏表紙は、上半分がヴェルレーヌの作品の紹介となっていたが、そのうち初期詩集3冊はルメール書店の出版物であった²⁵。そしてヴァニエ書店の書目が並ぶ下半分は「若手作家小叢書 (PETITE BIBLIOTHÈQUE DES JEUNES)」と題されているが、そこにはヴェルレーヌに匹敵するような文学者の名前は見られない²⁶。しかし、その2年後に刊行されたモレアスの詩集『カンティレーナ²⁷』は、表紙の下部に「レオン・ヴァニエ、「現代作家」の出版社 (LÉON VANIER, ÉDITEUR DES MODERNES)」の文字が躍っている。この時点では台頭する詩壇の新潮流の名称が未だ定まっていなかったことから、偏りの少ない「現代作家」という名称が用いられたものだろう。間もなくモレアスの「象徴主義宣言」が発表され、それと同時期に「デカダン」の呼称が「デカディスム」を駆逐すると、ヴァニエの自称もより明確なものとなっていく。1889年に刊行されたモレアスの『象徴主義の初陣²⁸』の広告欄は「象徴主義とデカダンの出版物 (PUBLICATIONS SYMBOLISTES ET DÉCADENTES)」と銘打たれ、マラルメとヴェルレーヌを筆頭に、ユスマンス、モレアス、ラフォルグ、ランボーらの名前が並び、百花繚乱のヴァニエ書店の最盛期を彩っている。

しかし、結論から言えば、ヴァニエ書店が本当の意味でルメールに匹敵する一大出版社となることはなかった。この事情は、まず刊行物がどれも小部数であり、その品揃えも、古典を含めた多くのラインナップを擁するルメール書店に比べた場合には非常に見劣りがしたこと、また印刷所が非常に貧弱であり、印刷能力に限界があったことが理由として挙げられる。この印刷所の稼働力の問題は、出版を待つ原稿が列をなし、作家のほうがちくたびれて他の書店に持ちかけてしまう、またようやく刊行されたときには公衆の興

²³ Paul Bourde, article du *Temps*, 6 août 1885 ; cité dans : Debaue, *op.cit.*, p. 25.

²⁴ Raoul Vague, article du *Décadent*, 6 novembre 1886 ; *idem*.

²⁵ ヴェルレーヌの著作のうち印刷所のための表記で出版社のない『歌詞のない恋歌』とパルメ書店から自費出版した『叡智』は、広告欄でヴァニエ書店の出版物として取り扱われている。これは残部を書店が引き取り独占販売したものである。両詩集はその後それぞれ1887年、1889年にヴァニエ書店から再版が刊行される。

²⁶ 当時無名であったラフォルグの自費出版による第1詩集『嘆きぶし』が「印刷中」として予告されている（実際の刊行は1885年の夏）。

²⁷ Jean Moréas, *Les Cantilènes*, Léon Vanier, 1886.

²⁸ Jean Moréas, *Les Premiers Armes du Symbolisme*, Léon Vanier, 1889.

味が既に他所に移ってしまっている、といった事態も引き起こした。ルネ・ギルは 1885 年に『語論』の原稿をヴァニエに渡していたが、同書は結局、その翌年に別の書店から刊行されている²⁹。その次の作品となる詩集『純真な所作』は 1887 年にヴァニエから出版されているものの³⁰、そのような事情を踏まえながらギルは後年、以下のように書店を回想する。

この本〔『純真な所作』〕はレオン・ヴァニエによって編集されたが、当時の彼はルメールに取って代わる勢いであり、微笑しつつの慎重さで遅れをとることさえなかったならば、それ以上になれたかもしれない。メルキュール・ド・フランスのほうが、彼よりも時宜を得る術を心得ていた…³¹

同様に原稿を渡したものの出版が果てしなく延期され、結局ドゥマン書店から刊行される『エドガー・ポー詩集』をめぐるのマラルメとヴァニエとの衝突も、書店が恒常的に抱えていた同種の問題が表出した一例と言えるだろう³²。こうして慎重な小書店はさらなる発展のきっかけをつかみ損ねたまま、1896 年 9 月 12 日に書店主レオン・ヴァニエの 48 歳での早い死を迎える。その後は未亡人が事業を引き継いだが、1903 年にアルベール・メッサンに全ての事業を移譲し、「サン=ミシェル河岸 19 番地」の四半世紀の活動にはこうして終止符が打たれる。

「ヴェルレーヌ」という看板

ヴァニエ書店による新たな分野の開拓のスタートにヴェルレーヌの姿があったことは先述したとおりだが、その活動期における書店と詩人との関わりをより詳細に確認したい。ヴェルレーヌの名前がヴァニエ書店の出版物に最初にあらわれたのは、『パリ・モデルヌ』誌 1882 年 7 月 25 日号における詩篇の掲載によってであった。これはヴェルレーヌにとって、1872 年にランボートとともにパリを去って以来、文壇の表舞台へのほぼ 10 年ぶりの復帰である。そして同年 11 月 10 日号に掲載された詩篇「詩法」に対する若い世代の反響は、ヴェルレーヌの再評価に道筋をつけるものとなった。またヴェルレーヌは 1883 年 8 月から評論『呪われた詩人たち』を『リュテース』誌に連載していたが、その編集者であるレオ・トレズニクはヴァニエとも旧知の仲であっ

²⁹ René Ghil, *Traité du verbe*, Giraud, 1886.

³⁰ René Ghil, *Le Geste ingénu*, Léon Vanier, 1887.

³¹ René Ghil, *Les Dates et les œuvres*, Crès, 1923, p. 94.

³² Cf. Steinmetz, *op. cit.*, pp. 275-276.

た³³。こうした経緯で 1884 年に『呪われた詩人たち』の単行本と詩集『往時と近年』が刊行される。以降、1896 年に詩人と出版者が相次いで世を去るまで、両者の関係は基本的に途切れることはない。

10 年以上にわたる継続的な出版と文壇における両者の成功は、書店と詩人との好ましい共同歩調を想起させるが、実際には一度ならずその関係は危機を迎えている。例えば 1889 年にヴェルレーヌは、既にヴァニエとの関係を解消したマラルメに、出版社を変更するための相談を持ちかけている。

まず握手と、気楽なおしゃべりをしてから、ドゥマンについてあなたにお話しさせてください。準備万端整った小さな詩集と、ある「全集」に関する話です。ヴァニエと奴の虚飾、いかに巧妙なものであれ奴の契約を「洗い流す」決心をしました。

いずれにせよ件のベルギーの出版社の住所を教えてください³⁴。

この後もマラルメとの手紙のやり取りを続け、実際にドゥマン書店とも交渉を持つが、結局ヴェルレーヌはヴァニエとの関係を維持する。その後もかつての出版社であるルメールや、新興出版社サヴィーヌに移ろうとする試みがたびたび浮上するものの、すべて実現を見ることはない。こうした背景にはヴァニエがヴェルレーヌに対して総じて好意的であり、その契約も理不尽なものではなく、むしろ詩人は特別の扱いを受けていた事実が存在する³⁵。同じくヴェルレーヌに出版社の変更を相談されたモーリス・パレスの返信は、冷静で現実的である。

私に意見をお尋ねになったわけですが、私としては […] ヴアニエに残るほうがよっぽどいいだろうと思います。彼がいくつかの欠点の持ち主だとしても、おそらく他の連中は数々の悪徳の持ち主です。彼はあなたの作品に与えられるべき称賛を知っています。それに間違いなく、彼はあなたに好意を持っている

³³ トレズニクは印刷所を所有しており、ヴァニエ書店の刊行物を印刷していた (cf. Debauxe, *op. cit.*, p. 32)。また『往時と近年』裏面の広告欄には同書店刊行のトレズニクの 4 冊の著作が確認できる。なお『今日の人びと』はトレズニクを扱った号をたびたび予告していたが、最終的には発行されなかった。

³⁴ 1889 年 7 月 22 日付マラルメ宛書簡 (*Œuvres complètes*, t. II, p. 1580)。

³⁵ ドゥボーヴは、書店の帳簿を確認することはできなかったが、唯一ヴェルレーヌの著作だけが自費出版でなく書店の費用で印刷されていたものと推測している (cf. Debauxe, *op. cit.*, p. 25)。

のです。どこであっても原稿料の清算はしばしば非常に面倒ですが、新顔を相手にした関係はいらだたいいものです…³⁶

しばしば、特にマラルメとの関係が語られる際などには、こずい悪役のイメージを押し付けられがちなヴァニエだが、実際のところ彼の「欠点」とは微妙な利害関係を文学者の立場から一方的に判断したものであり、おそらくその多くは職業上の慣行に過ぎなかったことが想像される。

ここで『今日の人びと』の話に戻れば、この(不)定期刊行物の編集がヴァニエ書店に帰した1885年頃は、ヴェルレーヌとの関係が確立され、新たな文学運動が興隆しはじめた時期に合致している。そしてこの年のうちに、ルコント・ド・リール(241号)、フランソワ・コペ(243号)、そしてヴェルレーヌ自身(244号)と、ヴェルレーヌが人物紹介を担当した最初の3号の『今日の人びと』が発行されている。このうち前2号は「ポール・ヴェルレーヌ」の名で書かれており、文学者の署名によって書かれる人物紹介は、フェリシアン・シャンソールが『今日の人びと』を離れて以来、初めてのことだった。前年の『呪われた詩人たち』の単行本刊行、またユイスマンスの『さかしま』によって名が知られたヴェルレーヌの署名が、文壇においてある程度の価値を持つとヴァニエが判断したものだろう。

ヴァニエはこうしてヴェルレーヌの知名度を最大限に利用するが、その反面、詩人にとっては、まず金銭的な条件が最大の執筆理由であったらしい。1886年4月15日のヴァニエ宛書簡では『今日の人びと』への、まったく素晴らしいゴンクールの記事を終えるところです。この労苦に見合った10フランをお願いします」と自画自賛しながら稿料を要求し³⁷、その数日後には「可能であれば、シャンジ氏に20フラン、同封のディエルクスとシュリ=プリュドムの記事の対価を渡してください³⁸」と書き、2号分の代金を当時の家主への支払いに充てている。これらの書簡からは『今日の人びと』の人物紹介1本につき、ただちに10フランが支払われる契約があったことがうかがわれる。『今日の人びと』に対して旺盛な執筆意欲を示すヴェルレーヌの姿勢と、恒常的な金欠状態にある詩人の目の前にぶらさがる目先の収入とを切り離して考えることはおそらく妥当ではないだろう。

³⁶ 1888年12月28日付のパレスによるヴェルレーヌ宛書簡 (*Paul Verlaine - Maurice Barrès : Correspondance*, La Chasse au Snark, 2000, p. 35)。

³⁷ 1886年4月15日付ヴァニエ宛書簡 (*Œuvres complètes*, t. I, p. 1198)。

³⁸ (1886年4月)21日付ヴァニエ宛書簡 (*Correspondance de Paul Verlaine*, t. II, p. 48)。

ヴェルレーヌの執筆態度の推移

とはいえ、金銭欲に突き動かされていたばかりではなく、ヴェルレーヌ自身に執筆に対する真摯な気持ちがあり、『今日の人びと』での人物紹介に一定の意義を認めていたこともおそらく確かである。1886年にヴァニエに宛てた書簡でヴェルレーヌは、『今日の人びと』でルイ＝グザヴィエ・ド・リカールを取り上げることを強く希望している。

リカールの記事は絶対に書きたいのです。なにより、良い友人であり、才能に溢れていますし、それから「高踏派」の決定的な歴史を、ルメール商会 (Lemerre and C^o) についての本当のところを語るためにも³⁹。

「高踏派の本当の歴史」という言葉は、当時のヴェルレーヌが置かれた状況を背景としている。1880年代中頃は、「高踏派」が文学史的事実として確立され、華やかに回顧され始めた時期であった⁴⁰。既に1881年にシュリ・ブリュドムが、また1884年にはコペがアカデミーに入会しており、そうした社会的認知を背景として、同世代のリーダーを自認するカチュール・マンデスによる『現代高踏詩集の伝説』が1884年に刊行された⁴¹。あたかも高踏派の「正史」であるかのように装うマンデスの著書では、第一次『現代高踏詩集』成立のもう一人の立役者であるリカールの存在は不当に軽んじられており⁴²、かつて彼の周旋によって文壇に第一歩を踏み出したヴェルレーヌの義憤は理由のないものではない。その翌年のヴァニエへの書簡では、ヴェルレーヌはさらに第一次および第二次『現代高踏詩集』の同人であったアナトール・フランス、ジョルジュ・ラフネートル、アンドレ・トゥリエ、アンドレ・ルモワヌの名を『今日の人びと』に採り上げる意向を示しており⁴³、マンデスが形成しようとする「正史」から洩れかねない人物を掬いとりとうとする姿勢は明確である。

³⁹ 1886年8月24日付ヴァニエ宛書簡 (*Œuvres complètes*, t. I, p. 1204)。

⁴⁰ cf. Yann Mortelette, *Histoire du Parnasse*, Fayard, 2005, pp. 359-390.

⁴¹ Catulle Mendès, *La Légende du Parnasse contemporain*, Bruxelles, Auguste Brancart, 1884; rééd., Slatkine Reprints, 1983. 同書の立脚点および当時の「高踏派」の状況に関しては以下の拙論を参照されたい。倉方健作「「高踏派」の擁護と顕揚 ——『文学の進展に関するアンケート』をめぐって ——」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』、第19号、2010年、157-170ページ。

⁴² 1870年代中頃からマンデスとリカールの間には『現代高踏詩集』の発刊の経緯については、どちらが詩集の「生みの親」であったかという点をめぐる応酬があった。cf. Louis-Xavier de Ricard, *Petits mémoires d'un Parnassien* [avec *Les Parnassiens* de Adolphe Racot], éd. Michael Pakenham, Lettres Modernes Minard, « avant-siècle », 1967, pp. 12-16.

⁴³ 1887年5月10日付ヴァニエ宛書簡 (*Œuvres complètes*, t. I, p. 1231)。

ヴェルレーヌによるこうした高踏派の歴史の補完が、はたして『今日の人びと』にヴァニエが期待する方向性と乖離してはいなかったかという疑問は残る。新潮流の発信地としての書店を築こうとするヴァニエにとって、自社と関わりを持たない高踏派詩人の掘り起こしがなんの宣伝にもならないことは容易に想像できる。アナトール・フランスを扱った『今日の人びと』346号は1889年に発行されたが、それ以外のリカール(385号)、ルモワヌ(398号)、ラフネートル(399号)、トゥリエ(406号)の人物紹介は、いずれも1890年代に入ってからようやく日の目を見る。ヴェルレーヌの原稿執筆から実際の刊行までの期間がときに数年に及ぶ理由のすべてをここに求めるのはやや早計であるにせよ、やはりその一端は、詩人と書店とのこうした意識のずれにも求められるように思われる。

その後の決定的な転機となるのは、ヴェルレーヌが不意に自分の「商品価値」をはっきりと意識する瞬間の到来である。1887年1月13日付のヴァニエ宛書簡で詩人は、「さあ！ 私たちで、なにか事を起こそうではありませんか。私の名前は、いまや、良い効果を持つものです。これを利用しましょう、しばらくして私が悲惨な死を迎えるなどということのないように、それにもしかしたら！ ずいぶんと金を稼げるかもしれませんよ⁴⁴」と勢い込んで話を持ちかけている。この突然の居直りは、良く言えば世間との対峙であり、悪く言えば自己演出への墮落に映る。そのうち前者、世間との対峙としては、ランボーとのかつての悪い噂を引き受けるという姿勢がある。1888年と推定されるヴァニエ宛書簡では、おそらくランボーの紹介記事に本名で署名することが穏当でないと感じたヴァニエに対して、本名で署名して何が悪いのかと開き直るヴェルレーヌの姿が浮かぶ⁴⁵。自らの過去を引き受けるこうした態度と並行して、ヴェルレーヌによる『今日の人びと』の文章としての質は著しく下落する。自分の名前に、つまり署名に価値があると悟ったヴェルレ

⁴⁴ 1887年1月13日付ヴァニエ宛書簡 (*Ibid.*, p. 1220)。

⁴⁵ (1888年)1月16日付ヴァニエ宛書簡 (*Ibid.*, p. 1188)。書き入れられた日付は「1886年1月16日」と読まれ、最初の書簡集はそのままで採用している。その後『全集』の編者は書簡の内容から「1887年1月」と修正して読むべきだろうと注記したが、現在では「日曜日に、貴書店員から土曜の夜に手渡された小包同梱の切手貼付済封筒2枚に入れて、手直したランボーの記事と、貴方宛の長めの手紙をテリエに託しました」とある1888年1月20日付ヴァニエ宛書簡 (*Ibid.*, p. 1298)の前に位置する蓋然性が高く、本稿ではこの日付を採った。マイケル・パケナムによる新たな書簡集は該当の年代まで未だ達していないが、同氏によって先立って公表されたリストによれば、当該の書簡は同様に1888年のものと判断されている (Michael Pakenham, « Répertoire de la Correspondance datée de Verlaine », *Revue Verlaine* n° 3-4, 1996, p. 36)。

ヌは、本文の執筆にかかる労力をできる限り削ろうと試みる。先に確認した『現代高踏詩集』の同人たちの復権を目論む詩人の姿勢も、その内実は次第に空虚なものとなってゆく。1887年5月末の書簡では4人の作品を手に入れてくれるようにヴァニエに依頼していたが⁴⁶、それが3ヶ月後には作品よりも作家論があったほうが望ましいと書き送り⁴⁷。またそのひと月後には、自分の名前を出せば断らないだろうから、本人のところから著作をもらってきてほしいと横着な依頼をしている⁴⁸。ヴェルレーヌの態度と自意識がこうして徐々に、しかし決定的に変化する過程は、露悪的な告白とともに名声を得て「文壇」の内部に安住する、詩人としての下降線と二重写しになる。

ヴェルレーヌによる『今日の人びと』の内容は当初に比べておよそ批評性を欠いたものとなり、また引用をふんだんに散りばめながら、文章全体は目に見えて短くなってゆく。自分の名前に寄りかかり、人物紹介の最初に「私の友人」と書くばかりでなく、自分に近い人物であれば、それだけで掲載の価値があると錯覚したようでさえある。ヴェルレーヌが書いた『今日の人びと』は27篇が刊行されたが、その他に3篇の未刊行原稿が残された。そのうち2篇は、いわば詩人の私設秘書であり、ときに過剰な愛情で接していたカザルスとビビ=ラ=ピュレという人物をそれぞれ扱ったものであった⁴⁹。またそれ以外にも、義兄で音楽家であったシャルル・ド・シヴリヤ、かかりつけの医師であったジュリアンを『今日の人びと』で取り上げる意図がヴェルレーヌにあったことが書簡から判明している。こうした試みが未遂に終わったことにも、また無名の人物の偏った人物紹介が刊行されなかったことにも、ヴァニエの平衡感覚が働いていた可能性は考えられる。

ヴェルレーヌとマラルメ：『今日の人びと』296号をめぐって

ヴェルレーヌによる情報収集

ここまでヴェルレーヌと『今日の人びと』との関わりを概観したが、マラ

⁴⁶ 1887年5月29日付ヴァニエ宛書簡 (*Œuvres complètes*, t. I, p. 1235)。

⁴⁷ 1887年8月31日付ヴァニエ宛書簡 (*Ibid.*, p. 1258)。

⁴⁸ 1887年9月26日付ヴァニエ宛書簡 (*Ibid.*, p. 1264)。

⁴⁹ 未刊行の3篇中、カザルスとモーリス・ブショールをそれぞれ扱った紹介文はヴェルレーヌのプレイヤード版散文全集に納められている。「ビビ=ラ=ピュレ」の原稿は散逸したものと見なされていたが、1937年に古書店の目録に一部の抜粋とともに掲載されていたことが『ルヴュ・ヴェルレーヌ』誌で報告された (*Revue Verlaine*, n° 3-4, 1996, pp. 346-347)。

ルメを扱った同誌 296 号に関しては資料が多く残っており、執筆に向けたヴェルレーヌの姿勢、ヴァニエの関与、また当時の両詩人の関係を窺う好個の例となっている。1885 年末、『今日の人びと』にマラルメを取り上げることとなったヴェルレーヌは本人にいくつかの質問事項を伝え、それに対してマラルメが今日「自叙伝」の名で知られる鉛筆書きの書簡で返信し、それをともに原稿が書き上げられる。これに並行して、ヴァニエの側ではカリカチュアを描く画家を選定している。そうして 296 号は 1886 年 2 月頃に刊行されたが、表紙を飾る半獣神の姿を描いた「愚かな肖像⁵⁰」(un portrait sot) はマラルメの意に沿ったものではなかった。ヴァニエに宛てて「この件に関して弁護士に照会したところです⁵¹」とまで書かせたこの一件は、マラルメの書店に対する不信を増幅させ、その後の決別を予告することになる。この経緯を順を追って確認していきたい。

まずマラルメへの質問事項から言えば、ヴェルレーヌは当初から直接書簡で尋ねたわけではなく、当時ヴェルレーヌと親しい関係にあった若き論客シャルル・モリスからマラルメに手紙が送られた。1885 年 10 月と推定されるその書簡では、人物紹介に挿入する未発表作品の有無、出自、国民公会に先祖はいたか、そしてヴィリエ・ド・リラダンの住所を知っているかという、およそレヴェルの異なる 4 項の質問が連なっている⁵²。その後 11 月 10 日に、あらためてヴェルレーヌが自らマラルメに以下のような書簡を送っている。

私がかちんとした服装であなたのお宅に伺い、インタビューをしていると想像してください。

番地は 87 でしたか、89 でしたか？ お手紙のレターヘッドにはどちらも見受けられますので。

あなたの出生地はどこですか？

パリですよ（それは知っています）。

ご家系は、どこの出身ですか？ 誕生日は？

文学上の計画は？（あなたが私に書き送ってくれた大著についての詳細を）

未発表の（短い）（散文）詩篇と韻文詩 1、2 篇はいかががでしょう？

⁵⁰ マラルメの 1887 年 5 月 2 日付ヴェルレーヌ宛書簡 (Stéphane Mallarmé, *Correspondance*, t. III, 1969, p. 107)。

⁵¹ マラルメの 1887 年 2 月 10 日付ヴァニエ宛書簡 (Stéphane Mallarmé, *Correspondance*, t. IV, 1973, p. 512)。

⁵² 1885 年 10 月と推定されるモリスのマラルメ宛書簡 (Henri Mondor, *L'Amitié de Verlaine et Mallarmé*, Gallimard, 1939, p. 87)。

かの国民公会議員⁵³はルイ 16 世の裁判の議長ではありませんでしたか？ 特筆すべき状況はありますか？ どのように亡くなりましたか？

至急！

これはヴァニエの『今日の人びと』の説明書きのためです。肖像画については、ヴァニエと相談してください。

—— ヴィリエについても同様の詳細をお願いします⁵⁴。

こうしてヴェルレーヌはマラルメに直接質問する貴重な機会を、大半が伝記的な、それも本人の著作とは関係の希薄な事項を尋ねることに費やしている。もちろんこれは、むしろ「略伝」に近い『今日の人びと』の人物紹介の基準を満たすためでもあっただろう。そしてこれらの事項も、「略伝」を書くという機会がなければ、ヴェルレーヌが興味を持つことはおよそなかったに違いない。1883年8月に『リュテース』誌で『呪われた詩人たち』の連載を始めるにあたりマラルメ本人の許可を求めた際は、ヴェルレーヌは伝記的な情報を一切求めていなかった。事実、『呪われた詩人たち』では、扱われた全ての詩人の生年も書かれておらず、これは『今日の人びと』とのテキストの質の違い、立ち位置の違いとして最も顕著なものだろう。

また『今日の人びと』のために未発表の詩篇を求める行為も、さまざまに解釈される。一義的には冊子の価値を高める、好事家の興味を引くという目的に適い、それは書店主であるヴァニエの望むところであっただろう。しかし、もしヴェルレーヌ自身になんらかのマラルメ像があれば、既に発表済みの詩篇の、少なくとも題名だけにでも人物紹介の中で言及するはずではないだろうか。しかし『今日の人びと』の人物紹介において、ヴェルレーヌはマラルメの既刊作品にも、『呪われた詩人たち』の際にマラルメに送らせた7篇の詩のどれにも言及することはなかった。そもそも『今日の人びと』に先んじてマラルメを扱った『呪われた詩人たち』の執筆の経緯もまた、ヴェルレーヌが対象に抱く興味の所在を疑わせる類のものであった。記事の掲載の許諾をマラルメ本人に訊ねてから3ヶ月後の1883年11月2日、ヴェルレー

⁵³ マラルメの曾祖父の弟、フランソワ・ルネ・オーギュスト・マラルメを指す。国王の死刑に賛成票を投じたこの人物に、マラルメは返信で一言も触れていない (cf. Steinmetz, *op. cit.*, p.19)。

⁵⁴ 1885年11月10日付マラルメ宛書簡 (Paul Verlaine, *Correspondance générale*, Fayard, t. I, 2005, p. 915)。唐突にヴィリエ・ド・リラダンに関する情報を求めた理由は、『呪われた詩人たち』と『今日の人びと』で彼を扱うためである。ヴェルレーヌがかつて所有していた著作は、ランボーと親密だった時期に売り払い、アブサントと葉巻に消えてしまったという。1883年11月17日付モリス宛書簡参照 (*Ibid.*, p. 826)。マラルメはこの要求には丁寧に答えている。

又は突如として未発表作品をマラルメに要求している。

『呪われた詩人たち』はもうすぐ掲載されます。[…]「あなたの」章（もしくは数章）は『リュテース』誌に2週間後に掲載されるでしょう。私の文章にきっと満足していただけることと望んでいます、そのためにもあなたの未発表作品をいただきたいのです！ 至急！ 至急⁵⁵！

繰り返される「至急！」 vite! という語は、この2年後の『今日の人びと』への情報を要求する手紙にも見られるものであった。友好関係に甘えるような態度もさることながら、ヴェルレーヌは期限が差し迫るまで記事になんのプランも立てていなかったのではないかという根本的な疑問を感じさせる。マラルメはいずれの質問にも快く回答し、未発表作品を添え、気分を害した様子を微塵も示すことはない。さらに『今日の人びと』の際の返信となった、いわゆる「自叙伝」のなかでマラルメは、ユイスマンスの『さかしま』とともに『呪われた詩人たち』を挙げて、これらが今日の名声と、自分を慕う若手詩人を身の上にもたらしてくれたと語っている。それらに『今日の人びと』を加えた1880年代後半の3つの主要なマラルメ紹介が、いずれも詩作品の引用を中心とした、「評論」からやや遠いものであったことは確かである。またこれらの全てにおいて、マラルメの姿はヴィリエ・ド・リラダン、ヴェルレーヌとともに現れており、さながら高踏派から離脱した詩人の三幅対として読者に示されたことも指摘しておきたい。

カリカチュアをめぐる問題

マラルメの手による「自叙伝」の分析、およびヴェルレーヌによる『今日の人びと』との対照の試みは、パスカル・デュランによる詳細な検討をはじめとして複数存在するが⁵⁶、一方でマラルメを憤慨させたカリカチュアの問題は現在まで十分に扱われていない。半獣神の姿をしたマラルメ像を描いた件の画家自身が、後に『今日の人びと』で紹介されていることについてもこれまでほとんど言及が無かった。これまで邦訳『マラルメ全集』をはじめ、当該のカリカチュアを紹介した邦語文献では常に「リュック」とされていた画家の名前は、『今日の人びと』402号の表紙から Manuel Luque というフルネームであったことが知られる。さらに人物紹介には「ルーケと発音してい

⁵⁵ 1883年11月2日付マラルメ宛書簡 (*Ibid.*, p. 819)。

⁵⁶ Pascal Durand, « Auto/biographie. Le dispositif Mallarmé/Verlaine », *Littératures* n° 44, printemps 2001, pp. 97-119.

ただきたい (prononcez : Louqué)」とあり、画家がスペイン出身であることが記されている⁵⁷。以上の点を踏まえれば、これまでの「リュック」という呼称には再考の余地があり、原音主義に沿えば「マヌエル・ルーケ」という表記が相応しいように思われる⁵⁸。

試みに本稿ではしばらく「ルーケ」と表記するが、彼はマラルメの号を担当する以前に『今日の人びと』で表紙を担当したのは、イタリア人冒険家を扱った289号の一度きりであった⁵⁹。つまりこの冊子では全くの新人であり、なぜ彼がマラルメを、続いてランボーのカリカチュアを担当することになったのか、その経緯は明らかではない。しかし、ルーケ自身を扱った『今日の人びと』402号では、彼が鮮明な写真をもとにしてカリカチュアを描くという、その制作手法が説明されている。これは、あまり知られていない人物のカリカチュアを描く際には有効な手段であることが想像され、また同時にルーケのカリカチュアに感じられる違和感を説明するものでもある。ルーケによるカリカチュアと、その他の画家によるものを見比べてみると、ルーケのものは極端に顔が小さく、アンドレ・ジル風の「大首絵」とも呼べる手法とは著しく異なっている。また1枚の写真に依拠するというその手法のために、ときに顔の向きがぎこちなく、ランボーの場合には稚拙とさえ言えるほど、体とのバランスが取れていない。本質的にカリカチュア向きの画家ではなかったのかもしれない。

マラルメがヴァニエに自身の写真を送ったことは書簡からも明らかになっているため、それがルーケに渡り、カリカチュアのもとになったものだろう⁶⁰。なお、この写真の行方は不明だが、同じ写真をもとに描かれたマラルメの肖像が1888年に刊行された『呪われた詩人たち』の第2版にも用いられている

⁵⁷ *Les Hommes d'aujourd'hui*, n° 402.

⁵⁸ その一方でアンリ・ド・レニエの手帖には、1887年8月、ヴァニエ書店に「カリカチュアを描いていて、外国のアクセントで話をするリュック (Lucque) というイラストレーターがやって来た」という記述がある (Henri de Régnier, *Les Cahiers inédits : 1887-1936*, Pygmalion, 2002, p. 95)。本人から直接聞いたのか、それとも他人を介したのかは不明だが、レニエの誤った綴りは、『今日の人びと』の注記にも関わらず画家が当時から一般的に「リュック」と呼ばれていた事実の傍証となる。

⁵⁹ ヴァスールとプラスはルーケがそれ以前に173号を担当したとリストに表記している。確かに東京大学所蔵の当該号の表紙はルーケによるものだが、これはヴァニエ書店による再版であり、初版を元にした早稲田大学所蔵のマイクロフィッシュではドゥマルルのカリカチュアが表紙を飾っている。同様に151号、172号にも2種類の表紙が存在することが判明しているが、画家の変更の理由も含め、全体像の把握には網羅的な調査が必要である。他のコレクションを精査する機会を待ちたい。

⁶⁰ マラルメの(1886年)3月20日付ヴァニエ宛書簡 (Stéphane Mallarmé, *Correspondance*, t. III, p. 26)。

ことは、右側の髪が奇妙に跳ねている特徴を見れば一目瞭然である。『呪われた詩人たち』の初版に用いられた、マネの肖像をもとにした図版を駆逐したこの絵に関して、マラルメは特に言及していないようだが、『今日の人びと』と同様に、面白い心地はしなかったに違いない。

ルーケに担当が決まるまでには、ヴァニエの側からはエストペという画家が推薦され、実際にマラルメと面会するところまで話が進んだことも知られている。このエストペに関しては、自ら推薦しておきながらほとんど面識がないことをヴァニエはマラルメに明かしているが⁶¹、おそらく人となりについてはヴェルレーヌから伝え聞いていたものだろう。1887年のヴェルレーヌの書簡によれば、エストペはヴェルレーヌと、その母の肖像を書いたことがあったという⁶²。これらの作品は現存しないが、1888年にヴァニエ書店から刊行されたモリスの評論『ポール・ヴェルレーヌ』の巻頭を飾った木版画は、おそらくエストペによるヴェルレーヌの肖像画を元にしたものである。木版画の右下には版画家のモーリス・ボーによる「MAURICE B」という署名が見られるが、同じく左下に記された「d. E」と読めるサインがエストペのものと考えられる⁶³。こうした経緯からは、『今日の人びと』のカリカチュアの担当を選ぶにあたって、ヴァニエが自社の刊行物に関わった画家を優先していた事実が窺われる。

結びにかえて：ヴェルレーヌのマラルメ観

最後に、『今日の人びと』を執筆した時期のヴェルレーヌのマラルメ観がどのようなものであったか、その一端を見ることで、今後、より詳細に両詩人の関係を捉える機会に備えたい。『呪われた詩人たち』で自発的にマラルメを取り上げたヴェルレーヌが、本質的にマラルメに好意を持っていたことは間違いない。しかし、先に見たように、実際に、なにか作品に特別な愛着を持ったり、その活動を逐一追ったりといった行為とはやや遠かったことも事実である。先述したような、ヴィリエ・ド・リラダンやヴェルレーヌ自身とマ

⁶¹ ヴァニエの1886年(6月)17日付マラルメ宛書簡 (*Ibid.*, p. 41)。

⁶² 1887年10月27日付ヴァニエ宛書簡 (*Œuvres complètes*, t. I, p. 1275)。

⁶³ Cf. *Verlaine : documents iconographiques*, Genève, Pierre Cailler, 1947, XLIV. なおアンリ・モンドールもマラルメ書簡集の註釈もエストペの名前を *Estopey* と綴り、邦訳『マラルメ全集』もこれを踏襲している。しかし『ベネジ芸術家事典』(*Dictionnaire des peintres, sculpteurs, graveurs et dessinateurs*, 4^e éd., 14 vol., Gründ, 1999) の記述は *David Estoppey* であり、これはヴェルレーヌの書簡での綴りと一致する。おそらく p を重ねる綴りが正しいことをここに付記しておきたい。

ラルメを並べる行為には、マンデスやコペ、シュリ・ブリュドムらと比べて不遇な扱いを受けているかつての高踏派詩人、という捉え方がその根底にあることがうかがえる。確かに、ヴェルレーヌのなかのマラルメ像は高踏派の時代のマラルメであり続ける。レニエの1887年5月26日の手帖には、ヴェルレーヌを病院に訪ねた折の発言が残されている。

今日はヴァニエとヴィエレ (=グリファン) と一緒にヴァンセンヌの養護施設にヴェルレーヌに会いに行った。[...] 彼は人生や文学の様々な話題を語り、そして友人マラルメを語った。「マラルメは、なんだか身を縮めて、皺をよせて、脚で腹を抱えた、臆病なクモみたいで、もはやかつての、体を丸めたハリネズミの様子ではないね。高踏派の時代には、その独創で、彼はびりびり尖って歩いていたのだが、みんなが笑いものにしたものだから、あんなふうに関閉じこもってしまったんだな...⁶⁴」

一言で言えば「引きこもり」と言った印象をマラルメに持っているわけだが、この感情はやがて、ローマ街に若い詩人たちが集まるにつれて、より辛辣に、ときに敵意のようにして表出される。1887年のシャルル・モリス宛の書簡では「ヴィゼヴァが毎月毎月マラルメ以外全員を罵っている『独立評論』 [...] ⁶⁵」といったマラルメ一派に対する軽い揶揄が見られるが、同年10月21日の書簡は、その不満がよりあからさまに示されている。「本当のところは、マラルメにもギルにも満足していない。老女めいたやり方や、裏切りやら当てこすりやら...⁶⁶」と語るヴェルレーヌは、そのサロンの閉鎖性、度の過ぎた「引きこもり」に向けられる。そして続く10月26日の書簡では、その背後にいるマラルメを名指ししながら、ついに怒りを隠そうとはしない。

マラルメを恨む理由？ ここできっぱり言おう。ヴィゼヴァのやつが『独立評論』に、ローマ街の87番地か89番地で（だいたい89か87かどっちなんだ？）かの地の「師」がくどくど言うことを、これ以上ないほどはっきり繰り返しているじゃないか。ヴェルレーヌは相変わらずの「雅びな宴」で私たちを退屈させるし、彼の散文（おまけに膿が出ていて、デ・ゼッサントのために書かれていないことは間違いない！）はつまらない主題ばかりを扱っている。彼のルイズとピエールで⁶⁷、また彼の出来事の数々で、私たちにどうしてほしいという

⁶⁴ 1887年5月26日の記述 (Régnier, *op.cit.*, p. 85)。

⁶⁵ 1887年のシャルル・モリス宛書簡 (Paul Verlaine, *Lettres inédites à Charles Morice*, éd. Georges Zayed, Nizet, 1969, p. 95)。

⁶⁶ 1887年10月21日付モリス宛書簡 (*Ibid.*, p. 107)。

⁶⁷ ヴェルレーヌの散文作品「ルイズ・ルクレール」と「ピエール・デュシャトレ」

のだろうね、ヴェルレーヌは、とね！ 一味のギルも、私をあえて小分けした上で、笑ワズニイラレヨウカ！ バジュだか誰だかと共謀して、投機目的で「デカダン」の流派に割り込むような商業主義の連中に分類する始末だ。マラルメの弟子たちは、このことを私が話すと、こう言うのだ。ヴァニエがあなたにそう吹き込んでいるのですよ、と！ ここだけの話だが、陰謀が企てられ、落とし穴が掘られた今となつては、半獣神やら乾杯やらのでたらめ話 (calembredaines faunesques et toastesques) と、アルセーヌとヴィルジニー⁶⁸からは、アナスターズとピュルシェリー⁶⁹からと同じく、手を引こうと思う⁷⁰。

「デ・ゼッサントのための散文」をはじめ、「葬の乾杯」や「半獣神の午後」といったマラルメの諸作品をあからさまに皮肉った言い回しに加えて、ここで客観的な自己分析をも試みているヴェルレーヌは、どうやら文壇の情勢をかなり正確に把握している。そもそもヴェルレーヌが自分から進んでマラルメの作品名に言及するという行為自体、『呪われた詩人たち』や『今日の人びと』の執筆の際には見られなかったものである。ヴェルレーヌが最も自発的にマラルメの同時代的な活動を語る機会が、感情に後押しされたこのような書簡にあらわれているという事実は一考に価するだろう。もっとも、こうした感情の噴出は一時的なものであり、ヴェルレーヌはことさらに事態を荒立てることはない。シャルル・モリス以外にこうした見解を伝えることも決してなく、マラルメに対しては常に友好的で、感じのよい態度を保ち続ける。これはちょうど、かつてコペに対してヴェルレーヌが見せた姿勢とも共通する。一足早い成功への嫉妬の念もあり、ランボーとともに数多くのパロディを製作してその安易な作風を揶揄しながらも、コペ本人には生涯節度を保った友情を示し続けた。ヴェルレーヌの「本音」の在り処の問題は、彼がときに見せる、そのイメージとは裏腹な卓越した社交性を抜きにして語ることはできない。詩人の後半生の活動を論ずる上で、ヴェルレーヌの文壇との関わり、そしてその基盤となったヴァニエ書店との付かず離れずの結びつきは、より詳細な研究を必要とする事項であるように思われる⁷¹。

を指す。いずれも 1886 年にヴァニエから刊行された短篇小説集『ルイズ・ルクレル』に収められている。

⁶⁸ 1887 年に刊行されたギルの詩集『純真な所作』に見られる人名。

⁶⁹ マラルメの詩篇「デ・ゼッサントのための散文」に見られる人名。

⁷⁰ 1887 年 10 月 26 日付モリス宛書簡 (*Ibid.*, pp. 110-111)。

⁷¹ 本稿は 2008 年 5 月 24 日に青山学院大学で開催された日本マラルメ研究会第 14 回総会での口頭発表の原稿を元に、その後の調査の成果を加えたものである。発表後の質疑応答および懇談において、数々の有益な情報をくださった研究会の皆様、この場を借りて深く感謝を申し上げます。